

1. 幼児期における読み書き能力の獲得過程とその環境要因の影響に関する国際比較研究

(1) 国際格差班・リテラシー調査班 2011 年度プロジェクト報告 No. I

学力格差は幼児期から始まっているか

—しつけスタイルは経済格差を凌駕する鍵；日韓中越蒙国際比較調査—

浜野 隆（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

内田 伸子（お茶の水女子大学名誉教授）

学力格差は幼児期から始まっているか、親や保育者は子どものリテラシー習得に何を期待しているか、経済格差は親子のコミュニケーションにどんな影響をもたらしているかを明らかにするため 2007 年度からリテラシー調査に取り組んできた。2011 年度は日本（東京）・韓国（ソウル）・中国（上海）・ベトナム（ハノイ）・モンゴル（ウランバートル）の親調査と保育者調査の結果を分析し比較した。主な結果と、結果を踏まえての親への提言・政策への提言を行う。これに基づき、2 月末には英語版と日本語版の報告書（浜野隆・内田伸子・李基淑・周念麗・タイ・ゲットベルゲル、2012 年 3 月；印刷中）を出版する。

韓国、中国、ベトナム、モンゴルとの共同研究の結果、それぞれの文化社会の違いを反映した差異が明らかになった。同時に、5 カ国に共通する結果も得られた。得られた結果に基づき、子どもの成育環境のあり方、親や保育者が子どもにどうかかわるか、発達援助の仕方について考察を進めたい。

【5 カ国比較調査の結果のまとめ】

I. 保護者調査の結果

(1) 子どもとの過ごし方について

5 カ国とも、子どもと毎日一緒に過ごすという親が多い。また、子どもと毎日話すと答えた親は、日本においてほぼ 100%であり、子どもとの情緒的な関係を大事にしていることが窺われる。

①絵本の読み聞かせ；

親が絵本の読み聞かせをするかどうかを5カ国で比較したところ、日本、韓国で絵本の読み聞かせの頻度が多く、次いで中国、モンゴルの順となった。ベトナムは絵本の読み聞かせをしない人は2割程度いることがわかる。絵本の読み聞かせが子どもの発達や読み書きの習得、語彙力の拡大に大きな役割を果たしていることからみて、絵本の読み聞かせが少ない国においては、親の子どもへのかかわりの一つとして絵本の読み聞かせに取り組んでいただきたい。日本では0歳～6歳を対象にした絵本の出版は子ども一人当たりになると年間平均で23.6冊も出版されていることから絵本の環境が豊かである。絵本の読み聞かせが少ないベトナムやモンゴルでは、乳幼児を対象にした絵本の出版が少ないということも課題であることから、子どものための絵本の出版も課題であると思われる。

②親自身の文字に触れる機会について

中国、韓国では本をよく読む親が多いが、ベトナムでは本を読む習慣のない親が多い。電子化の波はどの国にも及び、子どもや大人たちから手書きの読み書きの機会を奪っている。現代では大人は手紙や日記を手書きで書く習慣はほとんどなくなってきている。5カ国の中では日本はまだ手書きが尊重される文化が残っている。そのためか、日本では手紙を「月に1回程度書くことがある」と答えている。

5カ国とも読み書きは電子媒体に頼るのが普通である。携帯メールやパソコンを使う機会が多く、とくに中国で多い。ベトナムでは毎日使う人と、全く使わない人がおり、世帯収入との関連で、格差が生じている。

③子どもの好きな本について

好きな本があると答えたのは、日本、韓国、中国、モンゴルでは7割から8割であるが、ベトナムでは5割程度でやや少ない。読み聞かせが少ないことと関連していると思われる。

日本では絵本を好む傾向が強い。韓国や中国では童話を好む傾向がみられる。モンゴルでは童話と絵本の両方が好まれる。日本や中国、次いで韓国では図鑑も好まれる。

④本の蔵書数について

絵本の蔵書数は日本と韓国で多く、ベトナムとモンゴルでは少ない。物語の蔵書数は韓国で多く、ベトナムとモンゴルで少ない。図鑑は、日本と中国でやや多い。韓国では40

冊以上持っている家庭が一定数（10%弱）いる。学習雑誌は、中国でやや多い。韓国では40冊以上持っている家庭が一定数（5%程度）いる。

日本ではかつては新聞を朝受け取り、朝飯を食べながら新聞を読むという光景が一般的であった。しかし昨今では新聞の定期購読をせずに、ネットで新聞を読む家庭が増えている。電子化の波は5カ国に及んでいることから恐らく家庭での紙媒体の蔵書数は今後少なくなっていくだろう。時間とコストの節約になっても、失うものもあるに違いない。人間の知の財産にとって吉か凶かの判断は今ではできないが、注意深く見守っていく必要があるだろう。

⑤文字教育について

日本、韓国、中国では、興味を持ったら対応し、教えてあげるのが良いと考えている。実際には、韓国ではドリルや塾で積極的に文字を教える姿勢が見られる。早期教育熱の高さが文字教育において窺える。

また、日本や中国では興味のある時に教えるという姿勢がほとんどである。一方、ベトナムやモンゴルは家ではまったく文字を教えないという姿勢をとっている。

⑥子どもの文字関心について

ベトナムでは、子どもの読み書きへの関心が他国に比べて低いと思われる。ベトナムとモンゴルでは子どもが読み書きができる割合が低い。

日本で文字への関心が最も高く、読み書きもできる子が多い。日本では文字を読み始める時期は3歳から4歳頃である。日本や中国では読み始める時期がやや早く、韓国ではやや遅い。日本、中国では、文字を書き始める時期は4歳頃である。3カ国を比べると日本では平仮名文字を書き始める時期がやや早く、中国と韓国では文字を書き始める時期がやや遅い。書き始めの時期が国によって違うのは、2つの理由が考えられる。まず第一に、文字形態の違いがある。日本は平仮名、中国は漢字、韓国はハングル文字というように、文字形態が違い、習得の難度が異なるためと思われる。第二に、指先の運動調整能力の成熟は5歳後半頃と文化普遍だが、文字形態の違いが書く活動の難易をもたらしているため、韓国のハングル文字や中国の漢字の書きにとっては書く活動の開始が遅れるものと思われる。

日本でも指先の運動機能の成熟度が高く、指先が器用な女兒が男児よりも早くから文字

に関心をもち、文字を書き始める。しかし早い子どもでも四歳代は平仮名文字を全て書けるわけではない。特に男児は、全く平仮名を書かないか、書いたとしても、5歳後半頃までは「鏡文字」（鏡で映したような左右・上下が反転する文字）になることが多い（内田、1989）。無理して書かせると、指先の運動調整を支配する運動野に負荷がかかり、どもりなどの症状が起こるので幼児期に文字を書かせることには配慮が必要である（内田、1999；2007）。

⑦文字の道具的価値・文字の機能の気づきについて

子どもが文字を覚えることに関して、5カ国とも知的興味や知的好奇心を伸ばすことにつながると考えている。日本や韓国では文字の読み書きは本が読めるということを利点としてあげている。すなわち、文字の読み書き能力を習得することによって子どもが自分一人で本が読めるようになると考えている。一方、中国、ベトナムモンゴルでは、読み書きができるようになってくると、小学校に入ってから困らないという利点を挙げている。

⑧本に親しむ意味について親はどのように考えているか

日本では読み書き能力の習得により、楽しみが広がることや、想像力が豊かになることを挙げている。韓国では情緒が豊かになることを挙げている。中国では知的興味や知的好奇心を引き出すことにつながるのではないかと考えている。

⑨読み書きの習得についての考え方や世帯収入の関係；

日・韓・中・ベトナム

・収入低群の親は「文字を学ぶのに役立つ」、「小学校の準備になる」などの教育的な意味を重視している。

韓・モンゴル

・収入低群は「一人で時間が過ごせる」ことが本に親しむ意味であるとし、親子が離れることに意味をもつと考えている。

日・中・ベトナム

・収入高群は「情緒が豊かになる」という側面を重視している。

韓・中・モンゴル

・収入高群は「想像力が豊かになる」という情緒的な側面を重視している。

⑩子どもの学歴期待；

・韓国では子どもの望むところまで行ってほしいと考える親が多い。日本やモンゴルでは大学までが多い。中国やベトナムでも大学までを望む親が多いが、他国に比べて大学院までを望む親が多い。これは、学歴がより豊かな層へ移動する手段になっていることと、高校生の人口に比べて大学や大学院などが少ないという事情とが関連しての結果であると推測される。

⑪習い事について

ベトナムとモンゴルでは習い事はあまりしていない。幼稚園の活動で十分と捉えている。日本では運動系の習い事が多い。韓国と中国では芸術系と語学系の習い事が多い。韓国と中国では先取り教育を期待した早期教育熱が高いことが窺われた。

Ⅱ. 親調査：しつけスタイルと子どもの社会性の関連について

① しつけスタイルの分類について

因子分析の結果、5カ国のしつけスタイルは以下の通りである。

日本：強制型、共有型、自己犠牲型に分けられた

韓国：共有型、指示型、犠牲型、統制型に分けられた。

中国：温厚享受型、厳格強制型、子ども中心型に分けられた。

ベトナム：共有型、統制型、徹底指導型に分けられた。

モンゴル：強制型、共有型、統制型に分けられた。

「共有型しつけ」とは、子どもを大人と対等な人格をもった存在としてとらえ、子どもとのふれあいを大事に、親子で楽しい経験を共有したいと願い、親子の会話を重視して子育てをしている、しつけスタイルを指している。共有型しつけは、高所得層に多いが、低所得層でも家庭の蔵書数が多い家庭では共有型しつけになることが多い。

一方、「強制型しつけ」とは、権威主義的な統制を子どもに押しつけ、悪いことをしたら力のしつけも厭わない、子どもが親の言いつけを守るよう事細かに言い聞かせ、大人の思いで子どもの生き方を決めようとする権威主義的・強制的な関わり方で子育てをしている、しつけスタイルのことである。低所得層に多いという特徴が見られた。しかし、高所得層

にも強制型しつけをする親も多く、早期教育への投資額も同時に多いという特徴が見られた。

5カ国に共通して、共有的な態度と強制的（統制的）な態度が含まれていることは注目される結果である。

日本と韓国では、子ども中心で見守りながら指示をする態度（中国の子ども中心型）もみられるが、反対に生活のすべてが子どものためであり、自分のことは我慢する、犠牲にして子どもにつくす態度（日本の自己犠牲型や韓国の犠牲型）もある。犠牲型は世帯収入の高低のいずれにも見られるが、子どものせいで自分の生活がないと考えるような被害意識も見られる。高所得層では、犠牲型の親は育児不安に陥っている場合が多い。低所得層では、ネグレクトに走る親もいる。

子どもに罰（体罰や叱責）を与える統制型は韓国、ベトナム、モンゴルで見られた。

子どもに教え込むという徹底指導型はベトナムで見られた。

②しつけスタイルとSDQ（向社会性尺度）の関連について

5カ国共通して、共有的なしつけスタイルと向社会性との関連が見られた。共有型しつけスタイルは不適応傾向との負の関連が見られ、不適応傾向を軽減する関係にあることがわかった。

[負の関連が見られた項目]

日本：行為、多動

中国：多動、仲間関係

ベトナム：行為、情緒、仲間関係

モンゴル：多動、仲間関係

強制的なしつけスタイルは、弱い関連だが、向社会性と不適応傾向のどちらにも関連が見られた。体罰や叱責など、子どもに罰を与えるような統制型のしつけスタイルは、子どもの否定的な行為、いじわるをする、よく大人に対して口答えをするなどの不適応傾向と関連が見られた。

しつけスタイルと子どもの向社会性との間には相互関連性が見られる。子どもが落ち着いていて熟慮型である場合は、親が子どもに共有型で関われる。逆に親が子どもに共有型で関わるので子どもが安定しているのかもしれない。

子どもの不適応傾向を抑えるために、叱責や体罰を使うことが多くなり強制型しつけスタイルをとることになる。逆に、親が叱責や体罰を多用するため、かえって子どもが反抗的で、落ち着きがなく不適応傾向が増えるのかもしれない。

子どもの気質と、親の関わり方についての横断データからは因果関係は見きわめられない。しつけスタイルと子どもの社会性や気質、学力との因果関係を特定するには横断的・縦断的に検討することが必要である。

Ⅲ. 保育者調査の結果

①保育形態について

日本と韓国では自由保育、いわゆる「子ども中心の保育」が多く、ベトナムやモンゴルでは一斉保育が多い。中国はその中間である。

②文字環境について

中国や韓国では文字は遊びの中で必要に応じて教えるという方針の園が多い。中国や韓国では独立の図書室があり、図書の設備も充実している。

ベトナムでは文字に触れる機会を多くしたり、ドリルで指導したりする園が多い。家庭ではなく園で文字教育をする傾向が強い。園にはアルファベット表やドリルも置かれている。

日本ではパソコンやDVDは保育室には置かれていない。子どもの誕生日表や当番表で自然と文字に触れる環境が作られている。

モンゴルでも子どもの名札や子ども新聞など文字に触れるような環境が作られている。絵本に関しては、保育室に図書コーナーがあり、図書専用のスペースはない。

②保育者は保護者に対してどう考えているか

日本や韓国では保育者は親を「大人中心」「過剰な反応」と捉え、似た傾向がある。韓国やモンゴルでは「教育熱心」だと考えている。中国やベトナムでは「子どものことをよく考えている」と肯定的に捉えている。

③幼稚園や保育所など幼児教育施設の役割について

保育者は幼稚園・保育所では、子どもが基本的な生活習慣を身につけること、多くの人と一緒に活動すること、集団生活のルールを学ぶことなどが重要だと捉えている。

ベトナムでは小学校の準備のためにも重要であると捉えている。一方、日本では乳幼児期の発達課題を達成する場であり、幼稚園・保育所にはその時期の子どもの発達を支援する成育環境を提供するものであり、園での生活が小学校の準備のためとは考えていない。

5カ国とも保護者を育児から解放することは重要ではないと捉えている。

【総括的討論】

5カ国比較調査の結果を踏まえて5カ国調査の総括的討論を行う。なお、比較した5カ国のうち、日本・韓国・中国の3カ国では、子どもへの臨床面接により、子どもの読み書き能力や語彙力、アルファベットの読み書きなどを調査した。また対象になった子どもたちが小学校1年生の学習を終えた時点で、PISA型読解力テストの1年生版のテストを実施した。子どもを対象にした短期縦断調査の結果に基づき、親や保育者の子どもへの関わりが親子のコミュニケーションのあり方や子どもの学力にどのように影響を与えているかを析出して、親への提言、政策提言を行う。

1. 読み書き能力の習得には経済格差が影響するか

幼児期のリテラシー（読み書き能力）の習得は子どもの認知発達と強い関連がある。また語彙能力は知能発達や学力適応度の指標になることが明らかにされてきた（内田、1989；2008；東他、1995）。

リテラシー習得に社会文化的要因はどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにする目的で、お茶の水女子大学グローバルCOE「格差センシティブな人間発達科学の創成拠点」の国際格差班では、2007年よりリテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査に着手した。

学力格差は経済格差を反映しているという結果が次々と発表されている。学力の基盤力になるのは、幼児期から習得が開始されるリテラシーや語彙力である。リテラシーや語彙の習得が小学校の学力にどう関係しているのか。学力基盤力の育ちへの経済格差の影響は幼児期から始まっているか。幼児のリテラシーや語彙力（学力基盤力）の習得は経済格差要因の影響を受けるか。これらの問題を明らかにするため幼児に個別の面接調査を行い、親や保育者にアンケート調査を実施することにした。さらに幼児期のリテラシーや語彙能

力は小学校1年生段階でのPISA型読解力（学習到達度調査では「活用力」）とどのような関連があるかについて明らかにするための追跡調査を実施した。

5カ国調査と3カ国縦断追跡調査の結果を踏まえて学力に世帯収入は影響を与えるか、それともしつけスタイルや保育形態などの要因が影響を与えているかを総括しておきたい。

幼児のリテラシーや語彙力の習得（図）と家庭環境・保育環境との関連についての主な結果は次の通りである。

第1に、1995年調査に比べて、リテラシー習得が早期化（5歳児48%→80%）した。

第2に、リテラシーは3、4歳児では性差（女>男； $p<.0001$ ）が見られるが、5歳になると性差はなくなる。語彙力は4、5歳児で性差（男>女； $p<.0001$ ）が見られる。

第3に、リテラシーは経済格差（CP=700万円）の影響が見られ（ $p<.0001$ ）、特に4歳まで顕著である。語彙力は、加齢に伴い経済格差の影響が顕在化し、5歳児では差が最も大きくなる（ $p<.0001$ ）。

第4に、保育形態（一斉保育か子ども中心主義保育か）によって、語彙能力に差が見られ（ $p<.0001$ ）、自由保育の場合に語彙能力が高い。

第5に、共分散構造分析により、リテラシーの習得については3、4歳児までは、経済格差要因（家庭の経済格差、教育投資額差）、親の学歴、家庭の蔵書数、しつけスタイルの影響を受けるが、5歳児では、経済格差要因の影響はなくなると明らかになった。

第6に、清音の音韻的意識（内因）は5歳児で天井になり、リテラシー習得の教授効果（外因；一斉保育や早期のドリル学習など）を顕在化させる。

第7にしつけスタイルは「共有型」・「強制型」・「自己犠牲型」の3因子が抽出された。強制型は低所得層に多く、共有型は高所得層に多いことが判明した。

第8に、共有型しつけスタイルは子どもの語彙力と相関する。子どもと対等な関係で、親子のふれあいや家族の団欒を大切にし、楽しい経験を享受・共有しようとするしつけスタイルをとる家庭では子どもの語彙が豊かになることが明らかになった。

第9に、共有型しつけスタイルはSDQ尺度（子どもの社会性の発達の測定尺度）の向社会性の発達と強い関係があることが明らかになった。子どもと対等に楽しい経験を共有するような親の関わりが将来のよい対人関係やコミュニケーション能力の発達に資することが期待される。一方強制型しつけスタイルと子どもの問題行動（衝動的で多動、攻撃性が高く友だちと遊べないなどの特徴をもつ）と強い関係にあることも判明した。一時点の調査なので、因果関係は推測できないが、子どもに問題行動があるとどうしてもトップダウ

ンの強制型しつけになってしまい、それがまた子どもにとってのプレッシャーになり、問題行動が増幅するという、しつけスタイルと子どもの向社会性には循環関係があるのではないかと推定される。

2. 経済格差は子どもの学力基盤力に本当に影響を与えているか

クロス集計の結果では、リテラシー能力（読み書き能力）や語彙力（学力基盤力）は経済格差要因としつけスタイルの両方に関連があることが判明したため、どちらの要因がリテラシーや語彙の向上に効いているのか、両方が輻輳的に寄与しているのか、規定要因を明らかにするために、詳細な分析を行った。

[しつけスタイルの分類]

しつけスタイル尺度について因子分析を行ったところ、「共有型」（ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する）・「強制型」（大人中心のトップダウンのしつけや力のしつけ）・「自己犠牲型」（子どもが何より大切に、子育て負担感が大きい。育児不安か放任に二極化）の3因子が抽出された。

3つのしつけスタイルのうち、最も標準化得点の高いしつけスタイルに個人を振り分けた。その結果、共有型 33.4%(573名)、強制型 35.6%(612名)、自己犠牲型 31.0%(532名)とほぼ均等に分類された。

[しつけスタイルとリテラシー（読み書き能力）と語彙能力の関連]

それぞれの得点について分散分析を行った結果、読み・書きではしつけスタイルによる差はあらわれなかったが、語彙においてしつけスタイルの主効果が有意で ($F(2, 1708)=11.16, p<.0001$)、強制型よりも共有型において語彙の得点が高いと明らかになった (Tukey法: $p<.01$)。

[リテラシーと語彙の規定要因は何か]

読み・書き・語彙に影響する要因について重回帰分析を行った結果、子どもの年齢、性別、母学歴、収入は全ての得点に対して有意な関連が見られた。強制型と共有型しつけについては、語彙にのみ関連が見られた (Table1)。さらに分析を行ったところ、語彙得点に対する収入×強制型の交互作用が有意だった ($\beta = .05, p<.05$)。強制型しつけの影響は、収入低群では認められたが ($\beta = -.10, p<.05$)、収入高群では認められなかった ($\beta = .01, p=.70$)。収入×共有型の交互作用は有意ではなかった ($\beta = .01, p=.63$)。

以上をまとめると次のようになる。調査の結果、リテラシーは5歳になると経済格差や

性差要因の影響がみられなくなるが、語彙力(学力基盤力の指標)は加齢に伴い経済格差要因の影響が顕在化する。また、しつけスタイルと家庭の蔵書数も語彙力と強い正の関連をもっている。

収入低群で、なおかつ強制型しつけの傾向が高い場合に語彙得点が有意に低下することが確認された。そこで、収入の要因を統制すると、低所得層の家庭の子どもの語彙得点は高いという結果が判明した。しかし、しつけスタイルの要因を統制すると、経済格差要因と語彙力との関連が見られなくなるのである。つまり、経済格差が子どもの語彙に関連するというのは見かけの相関であり、語彙力に関連しているのは親の子どもへの関わり方であることが判明したのである(内田他, 2010; 2011, Uchida & Ishida, 2011)。

特に注目されるのは、低収入層であっても、共有型しつけスタイルをとれば、語彙能力は低下しないという点である。しつけスタイルは親が子どもへの関わり方を変えることにより、制御可能な要因である。大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し、楽しい体験を共有する家庭の子どもの語彙力が豊かになることが示唆された。家族で団欒や会話を楽しむ雰囲気の中で子どもは内発的な知的好奇心を発揮して環境探索を行い主体的に学んでいるのであろう。以上の結果から親への提言や政策への提言を導き出すことができる。

3. 行き過ぎた早期教育熱と学歴期待

韓国や中国では幼児初期から学習塾に行かせたり、家庭においてもドリルを使って文字の読み書きの学習を進めていることが多い。韓国や中国の早期教育熱の高さが浮きぼりになった。早期教育熱は、将来の学歴競争の先取り教育として受けとめられている。

中国やベトナム等では学歴が階級移動の手段として機能している。中国の高等教育機関(大学や大学院)の数は、大学進学人口を受け入れるには大幅に不足している。そこで、学歴期待は5カ国で最も高く、大学院まで行かせたいと考えている親が100%に及んでいる。韓国でも学歴期待は大きい。高等教育機関が大学進学人口にみあうだけ十分にあるため、「子どもが望むところまで行かせたい」と考える親が殆どである。日本においても「子どもが望むところまで行かせたい」と答える親が多い。

日本の子どもへの学歴期待は、韓国とは異なる事情から発していると考えられる。戦後65年にわたる偏差値主義教育のもとで、収束的思考(convergent thinking; 暗記能力)が重視され、拡散的思考(divergent thinking; 創造的想像力や問題解決能力/記述力)の育成面に配慮が十分ではなかったと推測される。2000年から始まった学習到達度国際比較

調査で毎回指摘されるのは、日本の高校生の論理力・記述力の低さである。回答が一つに収束するように構成された「アチーブメントテスト」に慣れている高校生は答はいろいろありうる記述問題、しかも考える過程が論理的に展開しているかどうかで評価される文章題には考えることを放棄し、白紙答案を出してしまうのである。「PISA 型読解力テスト」では先進諸国で最下位の成績である。韓国は、PISA 調査で毎回先進諸国でフィンランドに次いで高い成績をとってきた。また 2009 年に初めて PISA 調査に参加した上海は教育改革が効を奏していきなり世界一に躍り出た。このことから、OECD の PISA 統括顧問アンドレ・シュライヒャー氏は日本の高校生の学習意欲の低さに注目し、「日本の生徒の意欲向上が課題である」と指摘している。低学力の低い背景には高校全入の状況の中で、少子化により親が子どもを制御できなくなっていることがあるのではあるまいか。

4. 教育は国の未来を創る

しつけスタイルは親の自覚により統制・調整が可能である。子どものいる家庭では、父親も母親も子どもと楽しく会話し、家族の団欒を大切にすることが望ましい。また、家族の時間を保証できるような父母の働き方や母親だけではなく父親も育児時間を確保できるような制度と社会の側の意識改革が喫緊の課題となる。

[親への提言] (日本)

大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し楽しい体験を共有・享受する家庭の子どもは語彙力が豊かになることが明らかになった。親がよく本を読み、家族で団欒の時間を大事にし、親子の会話を楽しむ雰囲気の中で子どもは内発的な知的好奇心を発揮して環境探索を行い主体的に学んでいるのであろう。「しつけスタイル」は親の子ども観や子どもへの関わり方を変えることにより、制御可能である。子育てに「もう遅い」はない。調査結果を踏まえて、親たちには子育て 10 カ条を提案したい。

「子育ての 10 カ条」

- 第 1 に、親子の間に対等な人間関係をつくること
- 第 2 に、親は子どもの安全基地になること
- 第 3 に、子どもに「勝ち負けのことば」を使わない
- 第 4 に、子どものことばや行動を共感的に受け留め、受け入れる

第5に、他児と比べず、その子自身が以前より進歩したときに承認し、誉める

第6に、裁判官のように禁止や命令ではなく、「～したら」と提案の形で対案を述べる

第7に、教師のように完璧な・詳細な・隙のない、説明や定義を述べ立てない

第8に、子ども自身に考える余地を残す働きかけをすること

第9に、親は「待つ」「みきわめる」「急がない」「急がせない」で子どもがつまづいたときに支え、足場をかけ、子ども一步踏み出せるように、わきから助けてあげる

第10に、子どもと共に暮らす幸せを味わおう

[政策への提言] (日本)

リテラシー調査を行い見えてきた課題をまとめ、政策提言を行いたい。

(1) 子育て手当のあり方：すべての子どもへの子育て手当の配分は経済格差をますます拡大することになる。母子加算や交通遺児家庭への傾斜配分のしくみ、あるいは、高所得層の子育て資金援助の寄付制度などを作るべきである。

(2) 保育所の整備と設置：大都市では0歳児2万5千人もの待機児がいる。早急に保育所を設置し、整備することを要請したい。

(3) 保育者・教師の養成の質向上：高い質の保育、子ども中心主義の保育、子ども一人ひとりの視点に立つきめこまかな保育・教育を行える保育力・教育力をもつ保育者・教師の養成について国をあげて取り組む

(4) クラスサイズ再考：幼稚園3歳児クラスは15名、4歳児クラスは20名、5歳児クラスと小学校1～3年は25名以内でないと、子ども一人ひとりに丁寧な目配りができない。子ども中心の保育や教育の実現のために、幼稚園と小学校低学年のクラスサイズを再考すべきである。

(5) 保育者・教師の研修の保証：現場の保育者や教師は忙しすぎる。自主研修のできるような体制づくり、カリキュラム開発のための研究費の支給、管理運営のための補助職員の配置が求められる。

(6) 保育者・教師の待遇改善：給与水準の引き上げや研修のための出張旅費などを配分する

(7) 奨学金変換免除職の復活；資質の高い教師の養成のため教育職や福祉職に就く生徒・学生に対する奨学金は返還を免除する制度を復活させる。

【引用文献】

- 東洋（代表）（1995）.「幼児期における文字の獲得過程とその環境的要因の影響に関する研究」『平成4～6年度科学研究費補助金（総合研究A）研究報告書』
- 内田伸子（1989）.「物語ることから文字作文へ—読み書き能力の発達と文字作文の成立過程—」『読書科学』第33巻，第1号，10-24.
- 内田伸子（1999）『発達心理学—ことばの獲得と教育』岩波書店。
- 内田伸子（2008）『幼児心理学への招待—子どもの世界づくり<改訂版>』サイエンス社。
- 内田伸子・浜野 隆・後藤憲子（2009）.『幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響—日韓中越蒙比較研究、2008年度調査の結果—』グローバルCOE国際格差班報告書。
- 内田伸子・李基淑・朱家雄・周念麗・浜野隆・後藤憲子（2010）『幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響—日本（東京）・韓国（ソウル）・中国（上海）比較データブック』グローバルCOE国際格差班報告書。
- 内田伸子・李基淑・朱家雄・周念麗・浜野隆・後藤憲子（2011）『幼児期から学力格差は始まるか—しつけスタイルは経済格差要因を凌駕し得るか：【児童期追跡調査】日本（東京）・韓国（ソウル）・中国（上海）比較データブック』グローバルCOE国際格差班報告書。
- Uchida, N. & Ishida, Y. (2011) What counts the most for early literacy acquisition?: Japanese data from the cross-cultural literacy survey of GCOE Project. *PROCEEDINGS; Science of Human Development for Restructuring the "Gap Widening Society"*, *SELECTED PAPERS*, **6**, 11-26.